

歴博 くらしの植物苑だより

第124回くらしの植物苑観察会 7月25日(土)

日本の建築と森林文化

辻 誠一郎(東京大学新領域創成科学研究科・教授)

縄文時代以来の日本の建築は、木造建築を基本としてきました。これは、日本列島の生態系が森林を基本に成り立っているからです。森林資源である木材に、茅葺屋根のように他の植物資源が加わったり、土盛りや土壁といった地下資源が加わったり、また、基礎や床面に石という地下資源が加わって、多様な建築物が造られてきました。

このような建築物には、いつの時代においても、規模や構造は変化を遂げてはきましたが、基本的には大衆の住居としての建築物と、祭殿のような特殊な高床・高層の高度な建築技術をもって造られた建築物の二つがあることがわかります。縄文時代では、たとえば青森県の三内丸山遺跡や岩手県の御所野遺跡で見られるように、竪穴住居と掘立柱建物が集落を構成していることから知ることができます。弥生時代から古墳時代、高度建築技術をもって造られた建築物は際立った存在になっていきました。古代における仏教と律令の導入によって、導入された高度建築技術は都城の建設を可能にし、多層構造の塔や大寺院も造られました。全国の国分寺も象徴的なものでした。しかしまだ、農村の大衆の建築物としては竪穴住居が存続していたのです。

中世から近世では、都市の建設によって継承されましたが、また、大衆の住居も柱をもつ建築物へと大きく変身を遂げたのです。城郭は高度建築技術の粋を集めたものといえるでしょう。

このような日本の建築の歴史的な流れを、森林資源と木工技術から見ると、興味深い事実が明らかになってきます。縄文時代では、石斧など石の加工具が主であったため、もっぱら広葉樹材が利用されたのです。まさに広葉樹利用の時代でした。建築には、クリ材やシイ材といったタンニン含有量の多い樹種が選択されたのです。弥生時代から古代でこの様相は針葉樹材利用へと大きく転換します。これは鉄斧など鉄製加工具の普及に大きく依存しています。まっすぐな針葉樹材は、大量輸送と高層の大型建築物の造営を可能にし、都城からその後の都市建設を促進したといえるでしょう。中世以降では、森林資源の枯渇をスギやマツといった針葉樹植林が補うことになったのです。鋸挽き技術が加わったことも重要でしょう。

日本の建築の底辺には、縄文時代になって世界的にも固有性の高いものとなった日本の森林生態系の形成があるのです。降水量の多い温帯多雨気候によって育まれた広葉樹林帯、そして縄文時代後半以降のスギ、ヒノキ、モミ類などいわゆる温帯性針葉樹林の顕在化が、日本の木工技術と建築物に密接にかかわっていたことがわかるのです。

次回予告 第125回くらしの植物苑観察会 2009年 8月29日(土)

「朝顔の交配・育種のすすめ」 仁田坂 英二(九州大学)

10:00~12:00(予定) 苑内休憩所集合 申込不要 要入苑料